

# 真に「学ぶ」授業の在り方とは

## —国語科を中心とした授業改善の可能性を探る—

林 洋美\*, 藤井 伊佐子\*\*

(キーワード：授業改善 主体性 他者とのかかわり きく力 若手教員)

### I はじめに

平成29年3月に公示された新学習指導要領では子どもが主体的に学ぶことの重要性が挙げられている。これからの時代を生き抜く子どもたちには、主体的に社会の変化に対応し、社会を創造していく力が求められる。そのため我々教員は日々の教育を介して、このような力をもつ人材の育成を目指さなければならない。では、子どもが主体的に学ぶこととはどのようなものであろうか。

一方で近年の大量退職・大量採用による課題の一つとして、地域や学校によって中堅の教員数が極端に少なく、学校内における年齢構成の不均衡が生じていることが挙げられる。文部科学省からも初任者等の若手教員への指導技術の伝達が難しくなっているとの指摘がされた。

教育現場での年齢のアンバランスがもたらす影響は徳島県内でも見られる。具体的には、小中学校における初任者研修において以下のような課題が出てきている。

- 1 初任者を含め、経験年数の浅い教員が全体に占める割合が高くなり、OJT等による先輩教員から若手教員への知識・技能の伝達がうまくなされない点がある。
- 2 従来は、学習指導や生徒指導の技術などを共有したり、疑問や悩みを相談したりする教員組織が自発的に発生することも多く、「教員相互の学び合い」が自然になされる面もあったが、教職員が日々の業務遂行に追われる中で、このような機能が働きにくい状況が続いている。

- 3 初任者自身も日々の校務や学級経営で精一杯になってしまい、研修に力を注ぐゆとりがない。また、同年代の教職員が少ないために孤立感をもっている初任者や相談できる相手が少ない初任者もいる。

これらの課題は、初任者に限らず、経験年数の浅い教員に対しても同じ傾向があるといえる。置籍校の状況もこれに準ずるところがある。

これらの現状から、教師の指導力・授業力を向上させ、子ども自身の学びの質や生活をよりよくすることは喫緊

の課題であるといえる。この課題を受け、本研究では学習者の主体性と若手教員の授業力向上のための授業の在り方について実践を通して考察していく。

### II 研究の目的と方法

#### 1 目的

- (1) 若手教員の授業力を向上させ、児童の学びの質を高めるための「授業」の在り方を探る
- (2) 若手教員とともに国語科の授業実践を通して「学習者の主体性」と「教員の授業力」とがいかにか育まれるのかを検証する

授業改善を考えると「主体性」「他者とのかかわり」「きく力」の3つの視点がキーになる。このことについては、以下に挙げる先行実践、先行研究を例に述べる。

#### 2 先行実践校：富山市立堀川小学校

一人ひとりの子どもの考えには、それぞれの根拠がある。どんなつまらない発言の中にも、その子どもの過去の学習経験や生活経験が織り込まれているのであって、どの子どもも、それぞれにその子なりに独自の考え方の背景を背負って、個性的に問題に対決しているのである。学習指導は、まず、このような子どもの考え方の特質を認め、その言い分をすなおにきき入れることから始めなければならない。

『授業の研究』

堀川小学校では、授業中だけでなく学校生活全体、全クラスにおいて「きくこと」を大切にしている。

その「きく」という行為は、子ども同士の聞き合いに限らず、教師が発する言葉を子どもが理解するとき、逆に、子どもが発した言葉を教師が理解するときにおいても同じである。自分の思いを相手に伝えたいと思うとき、人は語る事ができる。「きくこと」は教育の要である。

授業中、子どもの発言が多いと「活発な授業」「熱心な

\*鳴門教育大学大学院 高度学校教育実践専攻

\*\*鳴門教育大学 基礎・臨床系教育部

態度」, 「子どもたちが意欲的に学んでいる」と思われがちである。このことについて, 堀川小学校の先生の言葉を紹介する。

「話しているからしっかり勉強しているということではなく, 一番勉強しているのは聞き手なんです。どう聞くかなんです。創造的に聞くということなんです。」

この言葉からも, 「きくこと」を大切にしている堀川小学校の教師の姿勢をうかがうことができる。このように, 授業において教師が何を大切にするかで子どもの学びの質が変わってくる。

### 3 先行研究：出力型授業

小西（関西福祉科学大学）氏の講義を聴講した際, 出力型授業について提案があった。出力型授業とは, 子どもの多様なこだわりを相互にぶつけ合う授業（⇒価値観偏差縮小型授業）のことである。まず, 子どもの手持ちの知識や解釈を出させることから始まる（＝出力型）。そして, そのこだわりを正当化するため, より多くの知識（資料・教科書・新聞等）を子どもが自発的に収集する。さらに, 授業中の子ども同士の議論の過程において, 極端なこだわりや間違いは正されていく。出力型授業は明確なゴールに必ずしも到達しない。オープンエンドで常に問い続けていく（＝仮の答えしかない）授業スタイルである。

その考えを表にしたものを以下に示す。

提案したい授業のかたち(小西2016)		
	入力型授業観（これまで） 情報量格差解消型授業	出力型授業観（これから：提案） 価値観偏差縮小型授業
示される目標	教授目標 「～はなぜか。」 など	活用目標 「君ならどうするんだ。」 など
モチベーション	知的好奇心・探求心	承認欲求
知識の位置付け	その獲得をめざす	その活用をめざす
終わり方	クローズドエンド	オープンエンド
教師の立ち位置	すべてを知っている人	交通整理をする人
求められる実践力	知識量・教え方のうまさ	子どもを見る目・クラスづくり

図1 入力型授業と出力型授業

本研究では, これまでの授業の大半であった入力型授業観も大切にしながら, 出力型授業観も取り入れていきたい。

### 4 堀川小学校と出力型授業の考えに通底するもの

- ①自ら学ぼうとする姿勢を育成する
- ②子ども同士が互いの考えや思いにとことん向き合う
- ③出てきた意見を受け止め, 受け入れる

子どもたちは主体的に学び, 他者とのかかわりによって自己の内面を広げ深めていく。それが可能となるためには「きくこと」が欠かせない。さらに, 「ききたい」と

思える背景がなければならない。そのような場面を国語科の授業において, どう設定するか。これを意識して授業を組み立てることは, 意識せずに授業を組み立てることに比べると授業の質が変わってくる。

## 5 方法

### (1) 実践の方法

- ①採用2年目の教員を対象に研究を行う
- ②第2学年と第4学年を対象とする
- ③1回目は, 「主体性」「他者とのかかわり」「きく力」の3つの視点(図2)をもとに筆者が指導案をつくり, 筆者が一単元授業実践をする

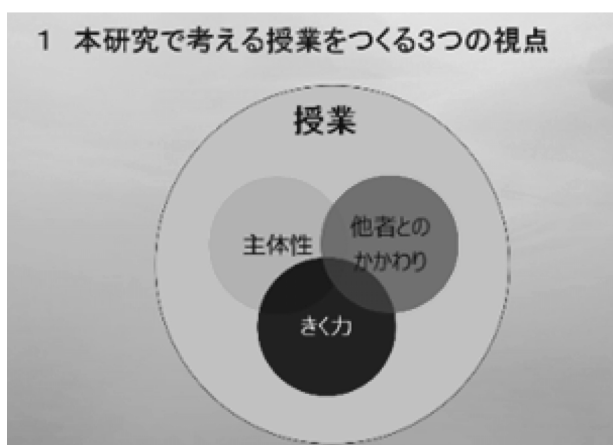


図2 本研究で考える授業をつくる3つの視点

- ④2回目は, 同じ3つの視点をもとに若手教員と筆者が授業をつくり, 若手教員が一単元授業実践をする

### (2) 評価の方法

- ①児童：プレポストの「授業」についてのアンケート
- ②教員：プレポストの「授業」についてのアンケート  
実践後のインタビューにより実践前との考えも併せて調査

## III 提案授業

### 1 2年生

#### (1) 教材

- ①教科：国語
- ②単元名：「たんぼのちえ」(光村図書)
- ③授業期間：5月1日から5月15日(全10時間)

#### (2) 指導における留意点

本学級は昨年度学級経営が困難であったため, 本年度の5月でも, 全体指導を行うのが難しい状態にあった。そこで, 今回は, よりよい授業を行うための素地として, 以下に挙げる3点に絞って指導を行った。

- ①自分の意見を書ける子
- ②教師の言葉で行動できる子

③話をきける子

(3) 具体的な指導内容

<p><b>主体性</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎時間の自己課題</li> <li>・自分の意見をもつ</li> <li>・ほめる</li> <li>・2択で意思表示</li> <li>・括弧抜きで書く手立て</li> <li>・一言感想</li> </ul>	<p>《主体性》 自分の読みが可能になるよう語彙を確認しながら話を読み進め、子どもたち一人一人が身近なたんぼぼをイメージしながら「ちえブック」を作成する。</p> <p>《他者とのかかわり》 劇化をする前に自分の考えをもたせることによって、互いの考えを活発に交流しながら、言葉を動作に移し、劇化していく。</p> <p>《きく力》 具体的に自分のたんぼぼをイメージすることにより、自分の考えを聞いてほしいという思いと同時に、相手の考えも知りたいと思う感情が生まれる。</p>
<p><b>他者とのかかわり</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・劇化</li> <li>・教科書クイズ</li> <li>・ホワイトボードを用いたのグループ活動</li> <li>・全員参加の学習活動</li> </ul>	
<p><b>きく力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本の読み聞かせ</li> <li>・めあての聴写</li> <li>・友達の意見につなげる</li> <li>・言語の動作化</li> <li>・ワークシートの聴写</li> </ul>	

図3 2年生での具体的な指導内容（提案授業）

①板書

- ア. 毎時間、最初に一人一人の本時の課題を設定するが、慣れるまでは提示した3つの例の中から自分がやりたい課題を選んだり、真似たりしてもよいこととする
- イ. 板書する内容は、必要なことのみとし、シンプルで分かりやすいものになるよう留意する
- ウ. 板書では、ノートに書くところ、考えるところ等を明確に指示する
- エ. ④「課題」⑤「めあて」⑥「自分の意見」⑦「振り返り」等、板書する際の記号を決めておく
- オ. 毎時間、課題設定と振り返りの時間を確保する

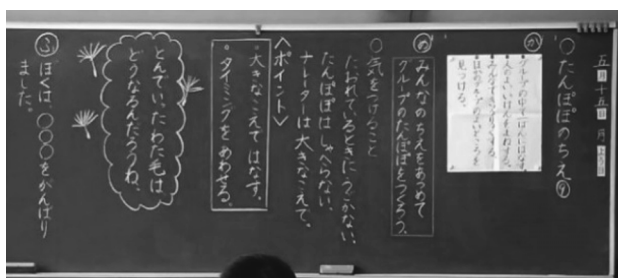


写真1 板書「たんぼぼのちえ」

②劇化

- ア. 低学年の子が効果的に話の内容を理解できるように

- イ. 自分の役割を明確にした後、練習を開始する
- ウ. グループの中でイメージを共有する時間を設定する



写真2 授業風景（「たんぼぼのちえ」劇化）

③児童のノート

- ア. 本時のめあて、漢字テスト等、聴写でノートに取らせることを繰り返すことにより、「きくこと」を意識させる
- イ. 自分の考えを書く時間を確保する
- ウ. 書きやすく、見やすいノートになるようノートを取る際のルールを決めておく

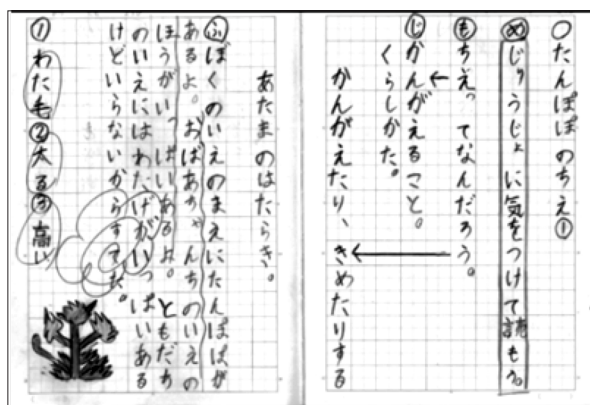


写真3 児童ノート「たんぼぼのちえ」

2 4年生

(1) 教材

- ①教科 国語
- ②単元名 「大きな力を出す」  
「動いて、考えて、また動く」（光村図書）
- ③授業期間：5月16日から5月24日（全8時間）

(2) 指導における留意点

- ①一人一役 毎時間役割を変える
- ②難易度 自分のノートを作る  
自分たちでまとめる  
グループ活動の場面を作る

ア. 一人一役

- 一人一役とは、1班4人の班を作っておき、班の中



で一人ずつ①から④の番号を決め、①の人は「進行」、②の人は「発表」等それぞれに役割をもたせ、その1時間は自分の役割の仕事をするというものである。その役割は、毎時間ローテーションで交代していき、4時間で一回りするようになっている。子どもによっては苦手な役割もあるが、班の中で協力し合ったり、上手にしている友だちのやり方を真似したりしながら、少しずつできるようになっていく。

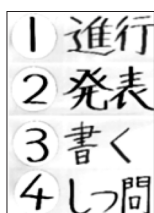


写真4 掲示

### (3) 具体的な指導内容

#### 主体性

- ・一人一役
- ・毎時間の自己課題
- ・自分の意見をもつ
- ・振り返り

#### 他者とのかかわり

- ・グループ活動
- ・ホワイトボードの活用
- ・ペア活動
- ・読み合い

#### きく力

- ・自分の考えと比較しながら友達の意見をきく
- ・友だちの意見に対して反応する
- ・めあての聴写
- ・ワークシートの聴写
- ・漢字テストの聴写

#### 《主体性》

本単元は作文を書くことが課題であるが、作文のテーマは与えられたものではなく、自分が書きたいものを考え、それに沿って構想を練る。

#### 《他者とのかかわり》

テーマはそれぞれ違っているが、同じ視点で作文を書き進めていくことにより、友だちの作文も理解しやすくなる。

#### 《きく力》

1つの教材でも、多様な考え方や方法があるものを用いることで、考えを言いやすくなるとともに、他にどのような考えがあるのか興味をもってきくことができる。他の意見と比較するためにはきくことが重要になる。

### 図4 4年生での具体的な指導内容 (提案授業)

#### ①板書

- ア. 毎時間、最初に一人一人の本時の課題を設定するが、慣れるまでは、提示した3つの例の中からやりたい課題を選んだり、真似たりしてもよいこととする
- イ. 板書には、子どもの意見を積極的に書くように留意する
- ウ. 板書では、ノートに書くところ、考えるところ等を明確に指示する
- エ. ㉠「課題」㉡「めあて」㉢「自分の意見」㉣「振り返り」等、板書する際の記号を決めておく
- オ. 毎時間必ず課題設定と振り返りの時間を確保する

#### ②児童のノート

- ア. 自分の考えをまとめるためのノート作りを意識させる

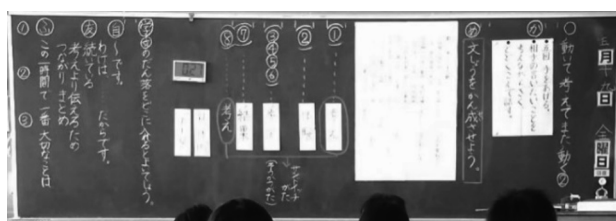


写真5 板書「動いて、考えて、また動く」

- イ. 板書にない発言も大切だと思ったことは書き留めておくように指導する
- ウ. コメントを足したり、ラインを引いたり、自分だけのノートを作るように声をかける
- エ. 友だちの意見を取り入れて、自分の考えを振り返ることを意識させる
- オ. 子どもの中に向上心が芽生えるように、毎時間個人の努力を評価する
- カ. ノートの評価基準を明確にする

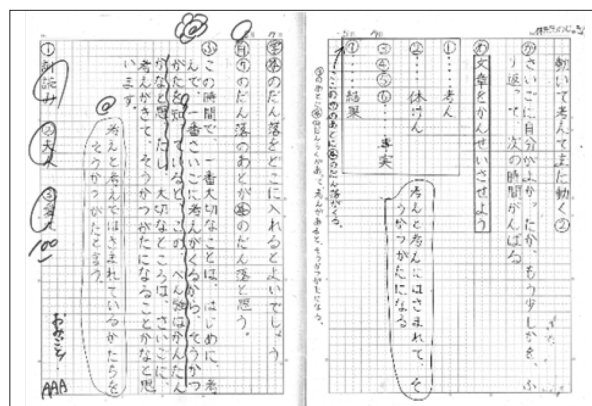


写真6 児童のノート「動いて、考えて、また動く」

#### ③読み合いの様子

- ア. 事前にどのような観点で作文を書けばよいかを確認しておき、読み合いの前にも読むときのポイントとして示す
- イ. 時間内にできるだけ多くの作文を読めるように配慮する
- ウ. どうしてその作文がよいか理由を考えさせる
- エ. 読み合った後には、感想を発表し合う場を設ける



写真7 授業風景「動いて、考えて、また動く」

#### IV 若手教員による授業実践

##### 1 2年生

###### (1) 教材

- ①教科 国語
- ②単元名 「スイミー」(光村図書)
- ③授業期間：6月14日から6月26日(全9時間)

###### (2) 具体的な指導内容

###### ①教室環境の整備

- ア. 子どものイメージが膨らみやすいような教室環境を作っていく際、子どもの注意が散漫にならないように毎日少しずつ掲示を増やしていく
- イ. 日々、子どもたちが掲示を発見する楽しみや「スイミー」の物語の世界に対する気持ちを高めていけるよう配慮する
- ウ. 子どもたちが作った海の生き物を教室環境に取り入れることにより、「スイミー」をより自分のこととして捉えさせ、物語の世界へ引き込む



写真8 教室環境「スイミー」

###### ②「スイミー日記」

- ア. 5つの場面の学習後には、毎時間スイミーになりきり一人一人が「スイミー日記」を書き、そのときのスイミーの気持ちに合った色画用紙を選び、その時間の日記の台紙にする
- イ. 場面ごとの色の変化を見られるとともに、視覚的にも場面の様子を捉えることができるように、書き終わった「スイミー日記」を教室背面に掲示する
- ウ. 読み合って「スイミー」の物語の世界観を広げることができるように、友だちの「スイミー日記」を掲示



写真9 掲示された「スイミー日記」

する

###### ③動作化

- ア. 言葉のイメージを一人一人が明確にできるように、作品に出てきた言葉の様子を動作化させる
- イ. 一つの言葉でもいろいろな受け取り方があることを感じられるように、一斉に動作化させる



写真10 動作化「スイミー」

###### ④交流

- ア. 単元終盤に、自分が好きな場面とその理由を紹介し合う時間を設ける
- イ. 話す立場と聞く立場を明確にして、活動する
- ウ. 同じ場面を選んでも、人によって理由や感じ方が違うことに気付くように意見を発表し合う場を設ける



写真11 交流「スイミー」

##### 2 4年生

###### (1) 教材

- ①教科 国語
- ②単元名 「『読むこと』について考えよう」

(光村図書)

- ③授業期間：7月11日から7月18日(全5時間)

###### (2) 具体的な指導内容

###### ①課題をつかませる手立て

- ア. 学習課題を自分のものとしてつかむために、自分の生活と比較させながら考えを深めさせる
- イ. ICTを用い、視覚的にも理解しやすい環境を作る



写真12 授業風景「『読むこと』について考えよう」

②相互評価

- ア. 評価するポイントを3つに絞り、それに応じた人を探すとこの活動を取り入れる
- イ. 同じ評価項目でも、異なった人を選んだ子ども同士で意見を交換し合い、感じ方の違いに気付かせる



写真13 交流「『読むこと』について考えよう」

V 授業効果の検討

1 児童の変容

実践前と実践がすべて終了した時点のアンケート結果を研究の3つの視点に対応させ、以下に示す。

アンケートの「あてはまる」「だいたいあてはまる」を肯定的な回答として集計し、パーセンテージを記す。

(1) 主体性

項目	学年	ブレ	ポスト
国語の勉強をすることは、将来、役に立つと思う	2年生	85	93
	4年生	93	89
今日の勉強で何をしたらいいかわかっている	2年生	78	85
	4年生	83	85

(2) 他者とのかわり

項目	学年	ブレ	ポスト
分からない問題は友達と教え合っている	2年生	74	78
	4年生	72	81
授業では話し合いや、発表などの機会がたくさんある	2年生	70	78
	4年生	66	70

(3) きく力

項目	学年	ブレ	ポスト
人の話を大切に聞いている	2年生	81	93
	4年生	86	89
授業で人の発表や、意見を聞くことは役に立つ	2年生	81	93
	4年生	83	89

(4) 基礎となるもの

また、本研究で取り上げた3つの視点以外にも、授業や学級経営の基礎ともなる重要な項目において見られた変容を以下に示す。

項目	学年	ブレ	ポスト
自分もやればできるという気持ちがある	2年生	74	100
	4年生	72	81
自分は周りの人（家族、友だち、先生）からみとめられている	2年生	67	81
	4年生	48	63
周りの人は自分のことを心配してくれる	2年生	67	74
	4年生	76	74

2 提案授業の意義

担任以外の教師（今回は筆者）が提案授業を行うことで、若手教員が自分の学級をT2として観察することができた。この提案授業の意義を次のように考える。

【若手教員が自分の学級の授業を観察する3つの意義】

- (1) 担任の考えていたものとは別の授業展開を提案することができる
- (2) 担任が子どもたちや学級の課題に気付くことができる
- (3) 担任が子どもたちの新たな可能性や能力を知ることができる

これらのことから、クラスを一定期間、担任とは別の視点から観察した第三者が、そのクラスに応じた授業を考案、展開することによって、担任がもつ「子どもたちや学級に対する概念」を新しいものにすることができる。

3 若手教員の変容

(1) インタビュー

① A 教諭：2年担任

ア. 教材研究

実習前：理解の早い子のことばかり考えていた。つまらないんじゃないかな。手立ての必要な子は、何



とかなるだろうと考えていた。

実習後：理解の早い子が退屈しないにはどうするか、自分の考えをもつことが難しい子や集中できない子にはどうしたらいいのかと複数の視点で授業を考えるようになった。

#### イ. 授業

実習前：国語の授業をすることは嫌いだった。子どもの反応があまりなかった。発表する子は限られていた。答えがすぐに出てくる。これで分かっているのかなと不安になっていた。

実習後：今は好きだ。やり方が分かってきた。どこで子どもたちが喜ぶかも分かってきた。子どもたちの反応が見えると、「ああ国語って面白いな」って思うことが増えてきた。

#### ウ. 今後について

子どもの実態に合った指導方法を実践することの大切さを学んだ。ただ単に教えるというのではなく、その子どもに合っていないと理解が早い子も手立ての必要な子も中間層の子もつまらないんだなと思った。どんな方法があるのかを（私自身が）身に付けていかないといけない。

#### エ. 考察

教師は経験を重ねると、接してきた子どもの数だけいろいろな手立てを身に付けていく。その一つ一つは簡単に身に付くものではなく、個人の試行錯誤の積み重ねであるともいえる。先輩教員がもつ、その手立てや方策を若手教員が学びたいと思っているという現状が見えてきた。A教諭には、目の前の子どもたちに合った授業展開を考えようとする姿勢が育ってきていると感じる。

##### ② B教諭：4年担任

#### ア. 教材研究

実習前：授業の流し方を見ていた。

実習後：単元全体をもっと意識して考えるようになった。考えた方がいいとか、考えようとかじゃなくて、考えないといけないんだ、考えないと分からないんだということに気付いた。そうじゃないと教師自身、何を教えたらいいか分からなくなる。学習計画を立てたいと思ったこともその一つ。

#### イ. 教科指導

実習前：教え方が分からなかった。どうしたら子どもが主題を捉えられるのか。どうやったら文章を書けるようになるのか。自分もあまり得意でない。どうしたらいいか分からなかった。

実習後：(教え方が分からないときは)ある。でも1年目と比べて、感覚は全然違う。落ち着いて子どもを見ている。どうやったら、子どもたちが楽しめるとかやってみようと思うかがなんとなく見えてきた。この場面で話し合いを入れてあげる

と、子どもたちがこの授業で何か学習できるんじゃないかなと考えられるようになってきた。

#### ウ. 授業

実習前：国語の授業をすることは嫌いだった。

実習後：今は好き。楽しい。子どもが教材内容を理解した瞬間を感じ取ったとき、子どもと一緒に話に入り込んで共感できた瞬間。国語は大嫌いだけど、子どもと一緒に気持ちになるのは好きである。作者の思いを詩にしているのが読めたとき面白い。詩や物語を読み解いたときにその面白さに気付いたり、共感できたりするのが、国語の楽しさなんだなと感じた。

#### エ. 考察

教材研究、教科指導、授業の全般において大きな意識の変化が見られた。意識が変化するという事は、アンテナが変わるということ。教師が意識し続け、努力し続けていくことで、授業力が磨かれ、向上していく。今後も子どもの思考の流れを中心に据えた授業展開の実践を積み重ねていくことが成長へとつながる。

## VI 考察および今後の方向性

本研究は、「主体性」「他者とのかかわり」「きく力」の3つの視点から授業を考えていくものである。その結果、教師・児童の双方において肯定的な意識の変容が見られた。このことより、本研究は有意な実践であったといえる。ここでは、研究の成果を考察するとともに今後の方向性についてまとめていく。

### 1 成果の考察

#### (1) 児童

- ①授業中に子どもが自分の考えをもつ時間を確保し、考えをもって活動に参加できるようにすることで、学習課題をより自分のこととして捉えられる。
- ②一人一人の子どもの考えを大切にし、どの子も自分のスタンスで授業に参加できる環境を提供することで、子どもが意欲的に授業に取り組むことができる。
- ③自分の意見や考えをしっかりとつことにより相手の意見をより「きこう」とする態度が育つ。
- ④学習能力の高い子どもたちの学びを保障するためには、課題解決への方法や手段に柔軟性をもたせ(図5)、学習過程を子どもたちがアレンジできるようにすることが有効である。さらに、その過程や成果を評価することによって、子どもたちは意欲的に学習に取り組み、学習の質は向上し得る。

#### (2) 教員

- ①子どもの反応を授業に取り入れ、授業を組み立てていこうとする意識の変容が見られる。

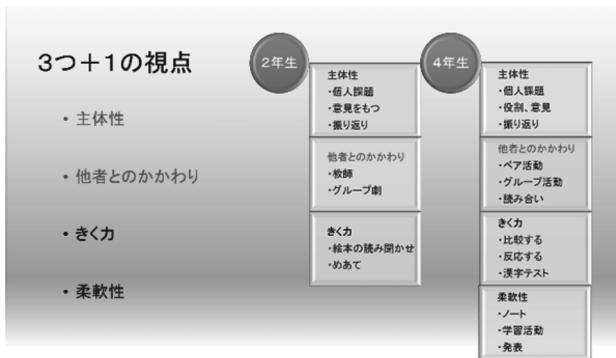


図5 3つ+1の視点と指導内容

- ② 1つの単位に見通しをもって毎時間の指導を行うことの重要性に気付く。
- ③ 本時につかませたいことは何かを教師がきっちりもって毎時間の授業に挑む。
- ④ 一つの単位を掘り下げて教材研究をすることによって、自分が行った実践内容とは別の授業展開等にも興味を示すようになり、教師自身が学ぼうとする姿勢を養うことができる。
- ⑤ 授業において何が大切なのかを考えるようになり、次の課題や方向性を見つけることができる。

## 2 授業の改善点

今回の研究で取り上げた指導内容や授業をつくる視点は、「あの教員だからできる」「あの学級だからできる」というものではなく、「誰でもできる」ことが前提である。若手教員の中には、日々時間に追われ、指導の方向性も明確に見えないまま授業を実践することや、授業をイメージするとき、何をそして誰をターゲットにしてよいのか分からない状況になることがある。しかし、経験を重ね、方法を習得し、授業を介して子どもの変容を感じられるようになると教師の視点が教科指導の中心を見据えるようになってくる。必死に取り組む若手教員。にもかかわらず、うまく回らない授業。それを早期に打破するためには手立てが重要である。その答えは案外身近にあるものである。

例えば、教師が教材を理解しないまま指導すると、指導の目的の見えないまま、パターンにはめ込んだ通り一遍の指導になりがちである。それを防ぐためには、教材研究がより重要になってくる。指導する教材の中で押さえておくべきことは何であるかを教師がつかみ、それを土台に単元を組み立てる。並行して、教師が単元全体構想や授業の前後のつながりをつかんでおく。言い換えれば、教師が見通しある指導計画をもっていなければならないということである。その過程において、本単元、本時で子どもたちに培う力が何であるかを明確にしておく必要がある。最終的には、それを達成するために目の前

の子どもたちにはどのような手立てが有効であるかを考えながら、具体的な展開を考案していく。目の前の子どもたちを中心に据えることにより見えてくるのである。

上記に述べたような一連の流れをおろそかにしては、真に「学ぶ」授業を実践することは難しい。

## 3 今後の方向性

教師である以上、授業が成立しないことには一人前とは言えない。毎日の授業をどのように作っていくのか。授業にはどのような視点が必要なのか。一人一人の教員が、考え続けなければならない。

本研究で取り上げた「主体性」「他者とのかかわり」「きく力」の3つの視点は、国語科に限らず、どの教科でもその教材に合わせるができる。

やる気あふれる若手教員には、教師として様々なことにチャレンジし、多面的な視野で教師としての基礎を養ってほしいと願っている。その一方、一つのことを深く掘り下げて追究することも重要な面がある。例えば、一つの単元を熟考することにより、自分なりの思いや考えをしっかりとつとることができる。そして、それは経験の長さで得たものに引けを取らない、認識の深さから得られるものとなる。

そして、それをさらに深め、広げるためには、若手教員や中堅・ベテラン教員を交えて、授業実践に対する思いや考えを交流する場があるべきだと考える。しかし、それはただ単に機械的に設けられた場という意味ではない。それぞれの教師が、確固たる自分の考えをもち交流する場ということである。考えをもち交流に参加し、それぞれが意見を出し合うことによって、授業実践を踏まえた新しいものの方や考え方を知ることができる。これは、何かを生み出すためのプラスの交流であるともいえる。そして、それを自分なりに解釈し、自分の実践に生かす。このことにより、若手教員も教師としての実践の幅を広げるとともに、授業や指導に対する理解を深め、教師としての力量を増すことができると考える。このように、若手教員がその場その場で確実に指導を受け、力を積み重ねていく機会が必要なのである。

しかし、それらはすべて目の前の子どもたちに応じたやり方を試行錯誤する教師の不断の努力と姿勢に支えられたものである。目の前の子どもたちをどのような視点で捉え、授業をつくっていくのか。それを教師が見出し、子どもたちとよりよい授業を作る手掛かりにすることが望ましい。

教師である以上、自分の力を過信せず、常に「授業とは何か」と問い続ける姿勢をもつこと。自分の指導を見つめ直し、自己研鑽を積むこと。そのような場に一人一人の教師がしっかりと身を置くべきである。「教師は授業で勝負する」、使い古された言葉であるが深い言葉である。



## 謝辞

最後になりましたが、本授業実践を進めるにあたり、徳島市大松小学校の松村哲男校長先生はじめ、ご協力頂いた濱口真衣先生、福井成美先生、置籍校教員の皆様、平成29年度4年2組の皆さん、2年2組の皆さんに大変お世話になりました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 富山市立堀川小学校 「授業の研究」(1959)
- 2) 小西 正雄 『『提案する社会科』の授業1これが未来志向の“新しい授業観”だ』(1994) 明治図書
- 3) 五嶋 隆裕 「授業実践力の向上を図るための若手研修の工夫と改善への試み」(2014)

